
N o t i t E m p o l o y m e n t E d u c a t i o n o r T r a i n i n g

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Not it Employment Education
or Training

【Nコード】

N0976L

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

そんなにニートが駄目なのか！お前はニートを馬鹿にしている！
何でニートじゃいけないんだ！

この三つのコンセプトを元にしたおそらく史上初の三冊のニート絵本からできた恐るべき小説。

この世のニートを多少救う小説。ニートよ今こそたて！ニートだからと負けてはいけない！

この三つをキーワードとした幻の絵本が小説版として登場。

絵本を目にしたことがあるあなたは、ひょっとして。× 中学校出身
ですね！？あの時見られなかったアレやこれを。日の目を見ることが
なかった初回限版小冊子も加筆修正でお送りします！

実録ドキュメント N E E T 絵本が出来上がるまで・・・。(前書き)

全部実話ですよ。

実録ドキュメント N E E T 絵本が出来上がるまで……

某学校で、このニート絵本なんてくだらないものが開発されました。事の始まりは、馬鹿一人。和呼之巳夜己から始まったことでした。

授業で子供向け絵本を作ることになった和呼之は普通の絵本じゃつまらんとアイディアを二時間ほど考えました。

考えた末に出来た作品は『白い壊し屋』。家に住み着いた白鼠と人間の超絶な戦いでした。それは三部構成ぐらいで、ニート絵本とはま逆と言って良いほどの逆向きの作品でした。

しかし、あるとき和呼之は別の授業中に閃いたのです。

今、社会現象となつて言うニートを題材にしたらどうだろう！思い立ったが吉日、それを友達に話してみました。話したこの時点で周りの方から、子供向けじゃねえだろ……。という声が続出しました。

しかし、これまでのようなありきたりな作品では、家庭科の5は取る事は敵わないのです【今成績表を見直すと、4でした。たいした事していない一学期が5なのは何ででしょうか】。

考えに考えた結果、和呼之はこの作品を作り上げることに決めたのです。

和呼之はこの絵本をつくるとき、ひとつの決意をしました。

「後々自分で作ったものが誇れる、そんな本にしよう。」

、というものでした。その結果、誇れるまで行かなくともまあこんなものでしょ。と、鼻息荒く言うことができる一冊となったのです。しかし、そこで和呼之のわがままっぷりはとまりません。

和呼之の鈍い眼光の魔の手は、何作ったら良いんだ……。という友人、NとTに伸びたのです。

Tが困っていると原案用紙にサラさらつとタイトル、こんなニートな僕だけ。と。

それをNに見せるとNが

「お、じゃ、俺もじゃね！」

と便乗してたとえ僕がニートでも。という和呼之から一方的に広まったN E E T絵本化計画は広がっていったのです。

授業中、授業も聞かずに和呼之は考えます。

ルーズリーフに板書を写してるふりをして考えています。

ルーズリーフに書かれた企画書は莫大な枚数に膨れ上がり、手書きの十数枚にまでなったのです。この間わずか一週間と数日。殆どの授業をこれに当てました。

そこには、表紙絵の下書きから、キャッチコピーの数々。そして、小冊子の収録内容に、裏表紙。カバーの折り返しに帯の折り返し。三冊分の特別付録。そんなことが永遠と十数枚にわたって書き記されていたのです。

現在は其の紙は行方不明となってしまうましたが。

そんなこんなで、出来上がった絵本、僕はニートでいいのかな。

そして、NとTの二人の分も和呼之が文以外を担当させてもらいました。

しかし、製作途中に、重大な事件が起きたのです。

それは、和呼之の不注意によって外部に漏らされてしまったニート絵本情報と、第一版ニート絵本三冊でした。しかし、それは人が人を呼び、瞬く間にニート絵本はクラスの一部からやがて大きな反響を呼ぶものとなったのです。

和呼之をはじめとする作家は、主人公の名前を決めかねていました。あまりしつくりとする名前がなかったのです。

それは、何とかニートで通そうとなりましたが。

挿絵担当中にも事件は起こりました。

Tがうつ伏せと仰向けを逆に覚えていたのです。そこから、この絵本内ではうつ伏せでなく〃仰向けでなくという一種の定義となってしまうのです。

そもそも、Tというのがなかなかの珍発言をしてくれる一緒にいて楽しい人だったのです。一例として、無用の長物や、鳥の風物詩、

伝説のスタチュー。畑沢任三郎、あご力ごりきなどでした。

そんなTやNの笑いなどの力を得て、ついに出来上がったかと思われた絵本通常版。

しかし、和呼之の絵本には初回限定特別版の小冊子製作という仕事が残っていたのです。

和呼之はそれを数日かけて、きちんと行数設定など細かい部分を設定に告ぐ微調整の末に、それを印刷直前までこぎ告げたのです。

しかし、そう簡単に初回限定小冊子発行は行かなかったのです。

完成していた原稿がパソコンが立ち上がらないというトラブルにより、データが消えたのです。

提出期限までに間に合わなくなってしまった和呼之はそれを手書きで作ることを決意し、一日中制作に没頭したのです。

そして、ついに平成二〇一〇年絵本三部作が出来上がったのです。

完成品は、絵本にカバー、帯、栞。そして初回限定特別版の特別小冊子FINALFACTだったのです。その小冊子にすら、リアルな製本を施した一冊だったのです。

出来上がった絵本は授業で公開時に大反響を呼び、クラスからの評判も上々のものでした。

予断ではありますが、出来上がった絵本の読み聞かせをクラス内で行うといった際に、賭け事に弱いNがジャンケンで負け、読むことになっていたのですが、まわし読みという形になってしまい、和呼之とTは若干悲しそうでした。

そんなこんなで苦勞に苦勞を重ね出来上がった二〇一〇年絵本を小説で大公開。

どうぞこれから繰り広げられるニートワールドをどうぞ、お楽しみ
ください。

以上、ニート絵本共同作家を代表しまして和呼之巳夜己からでした。

実録ドキュメント NEET絵本が出来上がるまで・・・。(後書き)

次回より、本編をお楽しみください。

長々と長文を読んでもくださり、ありがとうございました。

僕は二トでいいのかな（前書き）

一緒に絵本かいてくれた友人二人、ありがとうございました。あなた方のおかげで授業中に書いていた絵本がこんな姿でこんな所でもう一度大衆の目に晒される事となりました。結局二トの友達の名前、決まらなかったですね。不登校児【ふとう こうじ】ですか？それとも。ブルーですか？それとも……。まあ、こんなものでませんよね……。

僕はニートでいいのかな

中学三年生のニート。

ニートとは、社会に出て働かない者の事をさす言葉だ。

実は、中学生はニートではない。わかりやすく言うと、小説や漫画によくはさまれている読者アンケート。アレをよく見てほしい。職業欄に学生というものがあると思う。それか、小・中学生と言う欄があるはずだ。

だから僕は本当はニートではないのはわかっている。

けれど、僕の中身はもう、ニートそのものである。それは、自分でもよくわかってしているものだ。

今日もニートな僕は、社会に出て、働くことをしない。

ただ、遊ぶ。

ただ、生きる。

そして僕は今日も寝る。

今日のことを思い出す。

朝、学校へ行った。

友達の厄病神とあう。

たった一人の僕の大切な友達。

そのほかの人は全員……。

全員……。

僕は彼に会うために学校に行っているといっても過言ではない。というか、学校にすら行く理由があるのかすら不安になってしまう。

僕はニートだけれども、外へ出た。

たった一人の友達と出会い、話すただけに。

これだけでニートじゃないんじゃないかと思うが、世間はそれを認めてくれない。

それでもまだニートとして扱われる。

本当は、僕もわかってる。

僕がニートであるがゆえに、読者アンケートにはいつまでたっても無職に丸をつけてしまう。

頭ではわかってる。小・中学生に丸がつけられることを。しかし体がそれを拒んでいる。

本当に？

本当は自分が拒んでいるのに体のせいになっているんじゃないの？
わからない。

ワカラナイ・・・

僕は学校では空気だ。

誰もいることにすら気がついてもらえないような空気。

いるのが当たり前で考えもしない空気。

学校では僕は空気だ。

この前、掲示板で質問してみたら、答えが一通返ってきた。

空気があるからみんな安心指定来ることが出来るんだよ。と。

きれいごとだ。

キレイゴト

所詮僕が自殺志願者だと思ってとめている善良ぶったいけ好かないやつだ。

ネットの向こうでも僕は、空気として扱われているんだ。

悔しくなっただけが終わり、夕方、僕は家へとたどり着く。

社会的駄目人間、ニート。
こんな生活でいいのかな？
こんな人生でいいのかな？

答えはわかっている。

良い訳がない。けれどこの生活を・・・ニートをやめれ事が出来ない。

悲しみは消えることなどないのだから。

そして僕は何一つ変わらぬまま、いつものニート生活に戻っていく
のだろう。

僕はニートだから。

ニートでしか、ないのだから・・・。

僕は、所詮ニートなのだ。
哀れな

僕はニートでいいのかな

僕は二トでいいのかな（後書き）

次回は共同絵本作家二人目の作品を勝手に加筆修正してお届けいたします。許してね。

次回、こんな二トな僕だけど。
今こそ立て！若者よ！

たとえ僕がニートでも（前書き）

これは友達様の作品です。

ちなみにニート絵本は平成三部作です。これは二部目ですね。

ふと疑問に思うと、昔も、これからもニートの絵本を作ろうとするような人は出てくるのでしょうか。

んな馬鹿はいることだと思いますが。

お願いします。意外な発想な馬鹿を絶やさないでください。というべきか、出てこないデーというべきか・・・。

悩みどころっす。

たとえ僕がニートでも

たとえ僕がニートでも、友達の人と会うためには学校へ行く。その足取りは重く、幼稚園児にすら抜かれてしまう。

たかだか、十数分の道のりが、彼らには一瞬、僕には永遠に思えた。イキタクナイ。

行ったところで待っているのは、誰も僕を必要としない永遠の孤独。イキタクナイ。

行ったところで待っているのは、一人机で座っている自分。

どんなに小さな歩幅でも、必ず進んでいる限りは目的地に辿り着く。それはニートも逆らうことは出来なくて……。

目の前にはるか高く高く聳え立つのは、僕が通っているはずの学校。たかが、三階建てのそこは、入学時よりも遥かに大きく、存在感を出し、僕の孤独をよりいっそう演出してくれる。

屋上中心部にある時計が遅刻になってしまう時刻を知らせてくれるが、それを見ても理解が出来ない。

これから一歩でも先に行ってしまうえばそこは学校。

僕の入れない、聖域。

僕、ニートから見えてしまうと遥かに大きく場違いだと理解せざるを得ないような大きな、大きなそれ。

行きたくはない。

行かなければならない。

僕は我慢するだけでいい。

あと一年、ここで我慢すればすべてが終わる。
その後は何もないから。それで僕の学業生活は終わるから。

鳥のさえずりが、時計の音と重なる。

そのころには僕はいつの間にかどうやってか、僕がニートでなければ何時でも居た場所へとたどり着いていた。

彼らからの、面白半分、差別半分の視線は、僕一人を捕らえている。
帰りたい還りたいカエリタイ。

「元気にしてたか？」

センセイの手が僕の肩に乗る。

熱いその肉片が僕の方を侵していく。

生暖かい息が頬に触れる。

モウ、イヤダ。

ふと目線をそらした先には 君がいた。

はにかんだような笑みを僕に向けてくれる。

君と話している間も、彼らからの目線は変わることなく。

さらに冷たい目線が僕の心を刺し続ける。

結局、僕は教室にすることが出来なくて、
教室に居る事が許されていない気がして。

その場に居る事を否定されているような気がして。

僕は家まで走って帰った。

部屋に帰って僕はその服のまま泣いた。

どうして冷たい目で見られなければいけないのだろう……。ふと、周りを見るとそこにあるものは普通の学生の部屋にあってはいけないものがあって……。考えてはいけないことを考えてしまつて。その下にあるのは何処の物かわからない蜜柑のダンボールがあつて・。。。

そこで僕に別の考えが浮かびだす。

そうだ！！

僕にはゲームがある。

ゲームは人のように裏切らない。もしかしたら糞ゲーで評価を裏切るのかもしれないけれど。

けれどそれでも僕のことを冷たい目線で痛めつけたりはしない。

目線では。

そして、僕は結局何時ものニート生活に戻ってしまった。

たとえ僕がニートでも。

絵本製作時のおまけ
ブルーのAhゝだりい絵本より

僕はブルー、蒼い体のNEWヒーローさ！
何時もはダルダルな僕は、やっぱり今日もダルダル。
ああゝあだりい。

そんなダルダルの時間をすごしていたとき、古典的な地球を侵略し

ようと悪いやつら、UDONが現れた。

でも、俺は仲間のレッドやイエロー。ピンクにグリーン、ブラックを信じてる。

仲間を信じているのかも。

そんなことを思っていると、負けてしまった。

しかし、俺は信じる。

どこまでも信じる。

俺が信じなかったらこの世界はどうなるんだ！

ほら。最後はあいつら、勝った。

だるいから行かなくてよかったぁー。

こんな俺、ブルーをこれからもテレビや本などでよろしくね。

たとえ僕がニートでも（後書き）

次回、ついに平成ニート絵本三部作篇完結。

働かない若者たちの苦闘も、一段落・・・か？

これもありアルな創りになってますよ。こんなおまけもあつたんですね。ナツかシー

こんなニートな「僕」だけど（前書き）

ニート、やっぱり僕はニートなんだよ・・・。
ニ・・・ト・・・。

こんなニートな「僕」だけど

僕はニートだ・

前回にも言ったとおり、学校に友達がいる。

その友達は、たった一人の僕の友達だ。

それ以外の人は友達ではない。

僕を冷酷な目で見てくる、人たち。

今日の僕も、無理やり考える。

久しぶりの学校だ。行くときの道がやけに楽しい。

タノシイ……。

ホントウニ？

久しぶりのクラス。

だけれどやっぱり周りからの目も変わることなく……。

やっぱり、楽しくなかった。

仕方がないので、いつものように走って逃げて逃げて逃げて逃げて……。

家に帰ると僕は結局いつもの生活に戻っていた。

僕は知っている。

このままではいけないことぐらい。

そして僕はそのことも知っている。

変えられない現実はどうにもならない。

次の日、僕は学校にいくか行くまいかでかなり悩んだ。

けれどもやっぱり、なぜか知らないが、足だけが学校へと向いていた。

霰印裂けるブルー

ある日、いつものように基地でダルダルしていたブルーは突然進入してきたUDONの科学者、うーどんにつかまってしまった。

しかし、だるくてめんどくさいブルーは、それに抗うことさえしない。

自分のみに危険が迫っているというのに、どこまでだるいんだブルー！。

自分の生死がかかっているのだが！

ブルーはつかまってしまった。

突如、ブルーが入れられた機械が動き出し、ブルーの足のほうから徐々に避けていく。

これではブルーの避けるチーズになってしまう。

ああ！ブルーが裂ける、さけてまうがなあー！

しかし、何処をどうやったのかは全くわからないがブルーは、UDONの邪悪な魔の手から逃れ、無事にUDONを倒すことに成功した。

それいけ！ボク達のブルー！

やだよ、だるい。

・ ・ ・ かぎかつこ使うのもだるいのか、そんなにいいのか、
当にいいのか、ブルーいうう？

こんなニートな「僕」だけど（後書き）

次回、ニートに意外な出来事が起こるのかもしれないかもしれない！

ニートとオタクは別者です。（前書き）

これは自分の絵本に付録とした小冊子に掲載していたものの一本でした。

掲載時のタイトルは、ニートとオタクは別者です。I Another peopleでしたよー。

ニートとオタクは別者です。

今日も僕への行動は変わらない。

いつもいつも「ニート」と呼ばれる。

別に、それは真実だからいいとする。けれど、ひとつ言いたいことがある。

ニートとオタクは別モンです。

毎日毎日同じことの繰り返し。

何一つとして変わることがない。

ニートがそんなにいけないことなのだろうか。

【働く】という将来の選択肢を消した僕たちニートが、そんなにいけないことなのだろうか。

僕は中学校を卒業、義務教育を終えたら、夢を追うつもりだ。

そう、若者は夢を追うべきなのだ。

それを、ニート？夢を追う、純粋な若者がニートなのだろうか。

僕の何がいけないのだろうか。

でも、それが決まりなのだ。

「・・・きまり？」

つい、口に出して考えてしまう。決まりって何なのだろう。

僕のことが決まりから外れていると、万が一言うのであれば、彼らのしている僕への行為は、決まりに定められていることなのだろうか。

いじめというものは定められているのだろうか。

「オタクオタク」と連呼して喜ぶ権利はないはずだ。

それこそ、決まりに定められていないはずだ。

そう思うと、なんか、知らしめてやりたくなった。

「・・・？そうだ」

壁新聞があつた。

小学生の頃、社会見学だの何だのがあると必ず作らされたあの壁新聞があつた。

僕はそれを、今日が終わるまで作っていた。

知らしめてやるんだ。

ニートとオタクが別者であると。

翌日、何とか話をつけた僕は、開門とともにそれを廊下に掲示してもらう。

『ニートとオタクは別者です。』

その壁新聞はその日の昼休みより前に、姿を消した。

そして、僕は昼休みにお決まりのメンバーにお決まりの場所でお決まりのことをされた。

決まりに定まっていけないことを。

僕は存在（じたい）が出来ないのだろうか。

さらに翌日、僕はいつものように、部屋にあつた蜜柑のつぶれやすい箱を見つめている。

そして僕は・・・。

ニートとオタクは別者です。(後書き)

次回、ニートに友達が出来る。
その友達とはいったい・・・。

ちなみにこの物語の時空列はばらばらですので。いちおう。
出来れば最初はドキュメント、から読んでくださるとうれしいです
よー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976/>

Not it Empoloyment Education or Tra

2010年10月17日05時12分発行